

第 38 回 帰国報告会

日 時 2025 年 9 月 14 日（日）13:30 - 16:30
会 場 浦安市国際センター研修室 1 と 2 連結 + リモート（Zoom）
主 催 千葉県 JICA シニアボランティアの会
共 催 浦安市国際センター
後 援 JICA、千葉県、浦安市
講 師 講師 2 名とコーディネータの計 3 名
計 画

13:30 主催団体挨拶

13:35 来賓挨拶

青年海外協力隊千葉 OB 会：大久保 眞 様

千葉県 JICA 協力隊を育てる会：内山 彰彦 様

シニアボランティア経験を活かす会：齋尾 恭子 様



大久保 眞 様



内山 彰彦 様



齋尾 恭子 様

13:50 登内 明 コーディネータによる企画説明（20 分）

テーマ：異文化理解 - 文化とは何か

14:10 講演 上瀧 桃佳（60 分）派遣国：ソロモン諸島、職種：小学校教育

テーマ：違いを超えて、共に生きる

15:10 休憩（10 分）

15:20 講演 永江 豊（60 分）派遣国：マレーシア、職種：コンピュータ技術

テーマ：もうすぐ先進国入り？ - 教材のデジタル化支援から見たマレーシアの雰囲気

16:20 まとめと閉会挨拶

16:30 会場後片付け

17:00 - 19:00 懇親会

参加者の所属と人数

会場参加：一般県民 2 名、友好団体会員（来賓を含む）5 名、会員（講師を含む）17 名 小計 24 名

リモート（Zoom）参加：11 名

会場とリモート参加合計 35 名

冒頭、登内 明コーディネータによる企画説明が行われ、続いて JICA 海外協力隊として派遣され最近帰国された 2 名の講師による講演と会場とリモート参加者との質疑応答が活発に行われました。

コーディネータによる企画説明概要

異文化理解 – 文化とは何か

文化とは、人間が社会の一員として獲得する「振る舞い」のことです。これは振る舞いが複合された総体であり、要するに「振る舞い」が文化を理解する上でのキーワードとなります。それでは、異文化を理解するにあたって、私たちはどのような態度で臨むべきでしょうか。その考え方の一つに「文化相対主義（または文化相対論）」があります。なぜそのような文化が生まれたのかを尊重し、その背景を学ぶことが、文化相対主義の基本的な姿勢です。ただし、「尊重する」とことと「受容する」ことは全く別の問題です。結論として、どんな文化にも優劣はなく、尊重されるべきです。しかし、それを尊重した上で、受容するかどうかは個人の判断に委ねられる、ということになります。



報告会の会場と参加者

異文化を体験するシミュレーションゲーム「バーンガ」

ゲームの具体的な内容は以下の通りです。まず、これは「ページワン」に似たカードゲームで、4～5人のグループを最低 4 組作ります。そして、ゲームの勝者と敗者は、別のグループに移動します。重要なポイントは次の 2 点です。

第一に、各グループのルールは、実は少しずつ異なっています。しかし、参加者はそのことを知らないまま他のグループへ移動するため、そこでルールの違いに直面します。

第二に、ゲーム中は会話が一切禁止されています。

このように、ルールが違う場所、つまり「文化が違う場所」に移った時に、移動した人や受け入れた人がどのような反応を示し、どのような感情を抱くかを体験します。これにより、異文化に触れた時の感覚を擬似的に学ぶことができます。



登内明 コーディネータ

本日の講師紹介

本日の講師をご紹介します。

お一人目は、上瀧桃佳 様です。派遣国はソロモン諸島、職種は小学校教育です。

お二人目は、永江豊 様です。派遣国はマレーシア、職種はコンピュータ技術です。

上瀧 桃佳 講師 講演概要

テーマ：違いを超えて、共に生きる

皆さん、こんにちは。初めまして、上瀧桃佳と申します。私は 2023 年から 2025 年、今年の 2 月までソロモン諸島におりまして、2 年間の派遣を終えたところです。4 月からはまた、松田市の小学校に戻り、勤務をしております。

1. 自己紹介

私はもともと先生になりたいと思い、「どんな環境に子供たちが生まれても、自分の人生をデザインできるような環境や、そんな子供たちを育成したい」と思うようになり、もっと海外の子供たちを見てみたいと考え、青年海外協力隊に新卒で応募しました。訓練も終了した 3 月の末にコロナウイルスが流行し始めて派遣が延期となり 4 年間待って 2023 年にソロモン諸島に派遣されたという経緯です。ソロモンでは、算数、ICT、体育の授業や学校運営に従事しました。



上瀧 桃佳 講師

2. 本日の目的

ゴールは、私がソロモンで経験した異文化との出会いから見えた「共生」の本質を皆さんと共有することです。そして、多様性を受け入れる力を日常でどう活かせるかを考えることです。

3. ソロモン諸島の概要

クイズ、ソロモン諸島がどの辺にあるか、皆様ご存知でしょうか？ソロモン諸島は、オセアニアにありオーストラリアの右上にある小さな島々がソロモン諸島です。ソロモン諸島のイメージは？（会場から「戦争の跡が残っているのかな。」）その通りで、第二次世界大戦の激戦地、特にガダルカナル島は有名かと思います。私もそのガダルカナル島のホニアラ市というところに派遣されていました。

学校の概要：私が勤務していたのは、ガダルカナル州立のセントメリー・タナガイ小学校です。ソロモンは 4 学期制で、第 2 学期と第 4 学期の終わりに発行される成績表の内容は、通常の教科に加えて態度なども評価の対象となっており、その点は非常に驚きました。私の学校は生徒数が少なく、全校で 150 人でした。教科は、英語、算数、理科、社会があり、ここまでは日本と似ています。それに加えて「宗教」の授業がありました。ソロモンは 90%以上がキリスト教徒であるため、宗教の時間が毎日 1 コマ設定されており、お祈りの仕方や歌などを練習していました。

ソロモンにおける教育の現状：授業料が高額(約 20,000 円/年)、教科書や教材の不足、保護者の教育に対する意識の課題、教員の給料が低い、教員の働くことへの意識、子どもたち自身の問題（責任感）

要請内容：「教員の指導法を改善することによる授業力の向上」「児童の基礎学力の定着」「学習意欲の

向上」を目的に活動することでした。具体的な活動としては、算数の授業を教員と一緒に作ったり、学校が機能していなかったため、時間を守ることや学校行事を一緒に行ったりしました。

4. 異文化との出会い

「ソロモンタイム」、何でもシェア（分ける）文化、家族やコミュニティのつながりが大切、ソロモン人はクリスチャンが多いこともあり、「困っている人を助けられないのは意地悪だ」という考えが根付いています。そのため、何でも分け合うのが当たり前でした。親戚や近所との助け合いが日常的で、個人よりも「みんなで生きる」という意識が非常に強かったと思います。



上瀧 桃佳 講師

5. 支援と共生の違い

「支援」は、不足を埋める、片方向。「共生」は、相互理解、双方向、関係維持であり、お互いが違う存在であってもその関係を維持し、総合的に理解して共に生きていくことではないかと思います。

共生のための行動：私は自分なりに「ソロモン人と一緒に過ごす時間を増やす」ことを心がけ実行しました。校外学習の企画、教員との教材研究、ソロモンフードを共に食べる、ズンバで交流、畑作り、結婚式への参加など、様々な文化や違いに触れることができ、非常に良い経験となりました。

共生に必要な 3 つの力：1. 違いを活かす力：違いを認め、新しいものを創り出していくことが大切。2. 聞く力：私はこの点に最も注力しました。3. 相手を大切に思う力：思いやりの心です。共生とは、尊重、傾聴、そして思いやりがあれば成り立つのではないかと思います。

私たちの生活へのヒント：多様性への好奇心を持つ、違和感を対話のきっかけにする、子どもに伝えたい「ちがいを楽しむ力」、JICA で得た経験をこれからも子供たちに還元していきたいです。

6. まとめ

異文化理解・多文化共生は「相手の存在を尊重する」ことから！共生力＝相手を一人の人として尊重し、共感し、協働する力、Tagio tumas(ありがとうございました！)



上瀧 桃佳 講師/コーディネータ/参加者の交流（左：会場、右：Zoom 画面）

永江 豊 講師 講演概要

テーマ：もうすぐ先進国入り？ - 教材のデジタル化支援から見たマレーシアの雰囲気

1. 自己紹介：

永江 豊と申します。私は2022年度のJICA海外協力隊（2次隊）として、2022年11月からマレーシアに派遣され、2024年11月に帰国しました。派遣期間は2年間です。職種はコンピュータ技術で、配属先はマレーシアのシャーラムという場所でした。私が応募したきっかけは主に4つ：多民族国家であるマレーシアへの興味、マレー語への関心、JICAの専門家としてフィリピンに派遣された経験があった、日本で海外からの研修員に技術研修を行った経験があったことです。私は日立グループの情報関連部門に約30年間勤務しており、その中で海外の仕事にも携わりました。

2. マレーシアとは

マレーシアはタイの南に位置するマレー半島と、ボルネオ島の一部から構成されています。気候は熱帯雨林気候で、季節は雨季と乾季のみです。年間の平均気温は21度から33度の間で安定しています。人口は約3,400万人で、民族構成は、マレー系が65%、中国系の華人が24%、インド系が8%です。公用語はマレー語ですが、英語も準公用語として広く使われています。宗教も民族ごとに異なり、マレー系のほとんど



永江 豊 講師

はイスラム教（イスラム教はマレーシアの国教）、中国系は仏教やキリスト教、インド系はヒンドゥー教を主に信仰しています。マレーシアは旧宗主国であるイギリスを手本とした立憲君主制を採用しています。1981年に就任したマハティール元首相は、日本や韓国の成功モデルに学ぶ「ルックイースト政策」を掲げ、工業化と経済発展を推進しました。この政策により、多くの学生や社会人が日本や韓国へ留学・研修に派遣され、技術や経営を学びました。彼らが国の幹部となり、今日の親日的な国民感情の礎を築いたと言えます。マレーシア人の一般的な性格として、フレンドリーで大らか、多民族・多宗教が共存しているため、異文化への寛容性が高く、家族や友人、地域社会との繋がりを非常に大切にします。

3. 活動状況

私の配属先は、シャーラムにあるシアスト（CIAST: Centre for Instructor and Advanced Skill Training）という機関でした。工業系の職業訓練インストラクターを育成することをミッションとしています。私に与えられた要請内容は、「紙媒体で作成されている各マニュアルをデジタル化するための支援」でした。活動の最初の3ヶ月は、マレーシアとシアストの環境把握、専門用語の習得、授業見学などに充て、4ヶ月目から本格的にデジタル化プロジェクトに参加しました。2023年度と2024年度に同じコンテンツの教材を作成しましたが、最終的に完成品を届ける前に任期を終え、帰国となりました。活動を

通して見えた課題として、教材作成のスケジュール管理やレビュープロセスといったプロジェクト管理の手法が確立されておらず、その必要性を強く感じました。日本とマレーシアが協力し、アジアやアフリカの国々に教育を提供する「第三国研修」というプログラムや年に一度開催される「技能五輪」にも参加しました。また、マレーシアでは日本語学習が盛んであり、日本語教育の活動にも参加しました。

4. 生活状況

水は煮沸するか購入する必要がありました。電源構成は石油とガスが中心で、自国で資源が産出されるため原子力発電はありません。代表的な朝食は、ココナッツミルクで炊いたご飯にゆで卵やピーナッツを添えた「ナシレマ」や、薄く焼いた生地にかレーソースをつけて食べるインド系の「ロティチャナイ」です。果物もドリアン、スイカ、マンゴー等豊富、私はドリアンが苦手でした。休日には、現地の人々と一緒に標高 300m ほどの丘へハイキングに行きました。イスラム教の断食月「ラマダン」明けのお祭りでは、「オープンハウス」としてインストラクターの自宅に招待され、手料理を振る舞っていただきました。イスラム系やインド系の結婚式にも参加し、文化の違いを体験しました。国内には源泉かけ流しの温泉が点在しており、水着着用で入浴します。年に 2 回、クアラルンプールで盆踊り大会が開催されます。ムスリムの女性たちも浴衣を着て参加し、非常に楽しんでいる様子でした。



永江 豊 講師

5. まとめ

2 年間の活動を通じて、個人の壁を越えて他者と共生するためには、偏見や差別をなくすることが第一歩だと感じました。私たちは知らず知らずのうちに固定観念を持っていることがありますが、その壁を乗り越えるためには、その文化の人々と直接交流だけでなく、周囲の日本人などから情報を得ることも有効です。物事の価値観や考え方の違いを認識し、相手を理解しようと努める姿勢が、異文化理解において最も重要だと学びました。



永江 豊 講師/コーディネータ/参加者の交流（左：会場、右：Zoom 画面）

全体のまとめと閉会の挨拶（千葉県 JICA-SV 会 前会長）

皆様、本日は第 38 回活動報告会にご参加いただき、誠にありがとうございました。会場にお越しの方々、Zoom でご参加の方々、そしてご来賓の皆様に心より感謝申し上げます。講師のお二人には、非常に分かりやすいお話をしていただきました。活発な質疑応答からも、皆様の関心の高さがうかがえました。私自身もブータンでの経験があり、「ブータンタイム」といった共通の話題に、当時の記憶が蘇りました。



三輪 達雄 前会長

さて、私たちの活動にはもう一つの柱として「出前講座」がございます。こちらも活発に展開しておりますので、会員の皆様にはぜひご参加いただき、講師として千葉県内での活動にご協力いただくと幸いです。

本日は誠にありがとうございました。

懇親会

報告会終了後、近隣の会場で行われた懇親会のシーンです。希望者 14 名が参加しました。

